第2 教育研究団体の意見・評価

○ 全国英語教育研究団体連合会

（代表者 中村 勝徳 会員数 約60,000人）

T E L 03-3267-8583

1 前 文

今年で5年目となる共通テストは、2022年4月の高等学校の学習指導要領の改訂に伴う新課程テストであった。昨年までと同様に、過去のセンター試験で出題された発音やアクセント、語順整序等を単独で問う問題はなく、様々な資料や図表を通して英文を読み、知識・技能や思考力・判断力・表現力等を問う内容となっている。情報や考えなどを的確に理解したり適切に表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を育成する、という学習指導要領における目標を反映した出題となっている。

今年の共通テスト本試験「英語（リーディング）」では、2022年に発表された試作問題を反映した出題がなされた。「立場の異なる5人の意見を読んで、論拠を整理する」ことを求める試作問題第A問を反映した問題が第8問で、「読み手に分かりやすいように情報を整理し、文章の論理構成や展開等について考える」ことを求める試作問題第B問を反映した問題が第4問で出題された。「5領域の力を総合的に育成する「英語コミュニケーションⅠ」「Ⅱ」と、発信力の強化をねらいとした「論理・表現Ⅰ」の内容に対応」するという改訂のねらいが十分に達成されたかについては後述するが、試作問題と大きく変わらない出題であったことは受験者にとっては取り組みやすかったと思われる。

昨年と比較し、大問数が6から8へ変化したが、A、B問題などの分割がなくなり、設問数は39から33、解答数は49から44へ減少した。本文と設問及び選択肢を合わせた総語数は約5,600語で昨年から約700語減ったが、様々なテーマや形式の設問に対応するためには、受験者にとってはかなりの速読力が求められ、最後まで解き終えることができなかった受験者がいたことが予想される。一律な英文の読み方をするのではなく、素材となる英文の種類や示される図や資料等を理解し、目的に応じて様々な読み方をするのが要求され、設問の趣旨に合った読み方をしなければ時間が不足する。速読と精読のバランスの観点、特に思考力を測定する観点からすると、今後も語数を増やすことについては慎重になるべきである。情報量が増え、問題も複雑になり、短い時間の中で単に注意力や情報処理能力を測定するような試験に陥るのではなく、じっくりと考える時間を設定して思考力を十分に測るような試験問題であることが求められるのではないかと考える。令和7年度「英語（リーディング）」の本試験の平均点は「57.69点」であり、昨年「51.54点」から「6.15点」上がり、やや易化したという結果になった。さらに一昨年の本試験の平均点「53.81点」から考えると、今年の試験は受験者にとっては取り組みやすい内容であったと言える。正答率や得点分布を見る限りでは、大きな偏りなどはないが、同一英文における設問中に極端に正答率が低い問いがあるなど、設問や資料の明瞭さによって難易度が変化するようなケースについては慎重な検討をお願いしたいところである。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等への評価

令和7年度の共通テスト本試験「英語（リーディング）」は以下のような構成であった。

大問	内容	配点	設問数	解答数
第1問	初心者向けの淡水魚用水槽についてのパンフレット	6	3	3
第2問	空飛ぶ車についてのブログ記事	12	4	4
第3問	あるバンドについての物語文	9	3	6
第4問	「スローライフ」を勧めるエッセイ	12	4	4
第5問	会議の実施についてのメールのやり取り	16	5	6
第6問	友人が書いた物語についてのメールのやり取り	12	4	8
第7問	動物の睡眠パターンについての記事の概要作成	16	5	6
第8問	宇宙開発についての複数意見をまとめてエッセイ作成	17	5	7

第1問 資料に示された事項についての情報の読み取りとその内容の読み取りに関する設問である。設問数は3問、配点は6点であった。実際のコミュニケーションで出会う様々な形式の情報を読み取り、その情報を基に必要な情報を把握する力が求められる問題である。アメリカのホストファミリーが、淡水魚用の水槽を買う計画をしていて、その使い方についての説明が載っているパンフレットの情報を読み取る問題であった。

問1 資料の冒頭にある内容を読み取れば、このパンフレットが初心者用のもので初歩的な内容が示されていることが分かる。選択肢も紛らわしいものはなく解答しやすいものであった。正答率も高かったことから受験者にとっても取り組みやすい問題で、最初の問題はこういったレベルから始まることが望ましい。

問2 資料の“3. Position decorations”の部分からも正答を導くことができる。取り組みやすく平易な問題である。

問3 この問いについては議論があるかもしれない。まず、正答率が34.26%と極めて低い点である。問1、2と難易度が大きく変わる問題ではないにもかかわらず、正答率が低いのは設問に分かりにくさがあったのではないかと考えられる。“3. Position decorations”の第2文、“Leave space around the edges of the tank.”から確かに正答は導けるが、次の文の“Place tall decorations and plants at the back, and put short ones at the front.”という「命令文」が受験者にとっては分かりにくかったのではないだろうか。「もし置くのであれば」という条件的な記述であることが明瞭であれば、迷いなく正答④を選択できたと考えられる。昨年も出題された第3問Aの問1のようなイラスト問題であり、資料の理解を図で問う良問であるが、問題の分かりにくさで正答にたどり着けないようなことがないように留意願いたい。

第2問 資料に示された事項についての概要や要点の読み取りに関する設問である。設問数は4問、配点は12点であった。「意見」の内容が問われるなど、複数の情報を客観的に判断する思考力・判断力が求められる出題となっている。“Flying Vehicles”というタイトルのブログ記事であり、形式もテーマも同時代的で興味深いものであった。

問1 招かれた発表者たち全員が同意している点について問う問題である。ブログ記事の第2段落を読み取ることができれば正答を導くことができる。

問2 正答率が低かったことから分かるように、本文の“flying technology would need to be well tested and controlled to avoid accidents in the air”という部分の言い換えが正答④と合致するかに迷いが生じたと思われる。後半の“… controlled to avoid accidents”の部分が選択肢の“regulation”に相当することに確信を持てなかった受験者もいたと考えられる。

- 問3 3人のスピーカーのうちの1人の「意見」を明らかにする問題であった。本文の内容も平易であったため受験者には取り組みやすい問題であったと思われる。
- 問4は本文の主旨を問う問題であり、選択肢にも紛らわしさはなかった。
- 第3問 物語文の内容について、登場人物の行動や心情を把握し、事象を時系列的にまとめることが問われている。昨年はA、Bに分割されていたが、今年は昨年のBの問題形式に類似したもので設問数は3問、配点は9点であった。イギリスの高等学校に留学している生徒が興味深い物語を見付け、それを授業で発表することを求められている。イギリス英語のつづりも見られた。
- 問1 物語の筆者を選ばせるという新形式の問題であった。物語文の理解における登場人物の把握は重要であり、本文の内容や流れをしっかりと理解している必要があることから、良問であると言える。
- 問2 事象を時系列で並べさせるというこれまでも第3問にあった形式ではあるが、偽肢が1つ含まれているという点では昨年の第5問の間1の形式である。事象についての正確な時系列の把握はとても重要なことであり、偽肢が1つあることは差し支えないと思われる。今後この形式で良いと考えられる。
- 問3 バンドのメンバーの心情を推測させる問題であった。推測とは言っても本文最終文の“… we all felt it was the best performance of our lives.”の部分を読み取ることができれば正答を導ける問題であり、出題にも無理がなく受験者にも取り組みやすい問題であった。文章中に明示的に示されていないまでも、物語文の理解には登場人物の心情把握が重要であることから、このように類推を求めるような問題は良問であると言える。今後この種の出題にも期待したい。
- 第4問 2022年に示された「試作問題の第B問」に類似した形式であり、「スローライフのすすめ」というテーマでエッセイを推敲していく過程で、先生のコメントを参考にしながら論理的な文章を完成させる問題である。試作問題と異なる点は、今年の共通テストの問題では問2で段落のまとめとなる最終文を選択させている点と、問4で全体のまとめとなる文章を選択させている点である。第4問は言わば「読むこと」と「書くこと」の統合をねらいとした問題であり、今後の共通テストの作成方針を象徴する設問であった。
- 問1 先生の助言に基づき、ある文とある文の間に入るべき適切な語を選ばせる問題であった。もちろん問題の場面設定としては「文章を推敲していく過程」ではあるので、そこで問われることは「書くこと」の力を問うていると言えなくもないが、実質的には読解力を問うていると見することもできる。問1のような問題は標準的な読解問題でもよく見られるものである。技能を統合させて英語の力を測ろうとする方向性には大いに賛成するが、この種の設問でそれが実現できているとは言い難い。斬新な設問形式を開発し、新しい英語教育の方向性を反映させようとしているご苦労は大変なものであると拝察するが、発信技能の育成にはどのような出題が有効かを改めて考えていただきたい。
- 問2 段落の最終文を選択させる問題であった。問題としては素直で取り組みやすい問題であったが、前述のように従来の読解問題の域を大きく超えてはいない問題であった。
- 問3 文章全体のまとめとなる文を選択させる問題であった。選択肢に紛らわしさがなかったので取り組みやすかったと思われる。
- 問4 試作問題と同じ形式であった。それまでの本文の内容、特に第4段落の内容を正確に把握していれば正答を導くことができたはずである。
- 第5問 メールのやり取りを読み、さらにそこに示された別の資料を参照しながら必要な情報を整理したり、適切なイラストを選択したりすることが求められている問題である。「ローカルビジネス

スに関する会議」を実施していくにあたり、学生と教授がメールでやり取りをする設定になっている。1通目のメールには当日の進行を示す表が示されている。設問数は5、配点は16点であった。

問1 会議を運営するにあたっての学生の不安な点について問うている。1通目の最後の部分、“This is my first time being on a committee like this, and I am rather anxious …”の部分が読み取れば正答を得ることができる。このように必要な情報を様々な形式の資料からの確に見付け出させる問題は共通テストの特徴であり、選択肢も紛らわしいものがなく、まさに良問と言える。

問2 ライアン教授からの返信について必要な情報を得る問題であった。選択肢が6個と多かったが、必要な情報を的確に捉えられれば正答を得ることができる。

問3 ライアン教授の返信において、教授が会議の申し込み時期についての意見を述べていることを把握する問題である。問2も同様であるが、設問において見付けるべき情報を明確に示し、その情報把握を求める問題は、受験者にとっても取り組みやすく、さらに目的に応じた読み方を問うものでとても好ましい出題である。

問4 ライアン教授からの返信に基づいて、会場の席の置き方を正しく図示しているイラストを問う問題であった。イラスト問題はその作図によって紛らわしさが生まれてしまうことも少なくないが、本問はその差異が明確に示されており、正確な読解をすることができていれば迷うことなく正答を得ることができたと思われる。

問5 学生から更に返信を送る際に含まれるであろう情報について問う問題であった。1通目のメールで未決のものであった事項で、かつライアン教授からの返信で特に言及されていなかったものが正答になる。全体を通して、見付けるべき情報が明確に示されており、さらに必要な情報を得るために資料を行ったり来たりすることが求められており、実際の言語活動でも必要とされる力を測っているという点でとても好ましい問題と言える。

第6問 物語文を読み、その内容を正確に理解するとともに、事象を時系列で把握したり、その物語文についての感想を述べるメールを完成させたりする問題である。物語を読んでその改善策を示すという新傾向の出題がなされている。設問数は4、配点は12点であった。

問1 物語文の内容を時系列でまとめる問題である。事象が必ずしも時系列で書かれていないため、正確に読解しながら事象の流れを把握する必要があるため、受験者にとっては、やや時間を要するものであったかもしれない。

問2 主人公の姉であるMelodyの能力を問う問題。まとめて記述されているわけではないので、必要な情報を見付け出すことが求められている。

問3 物語文における主人公の母親の発言を問う問題。主人公の姉とは離れ離れになってしまった経緯を読み取ることが必要であり、正確な読解が求められる。

問4 本文に明示されていない内容を選ぶ問題であり、全体の流れを理解し、さらに必要な情報を考えさせる思考力を問う問題であった。

創造的な物語文を読み、時系列が錯綜する中でその推移を正確に把握し、物語文がより良くなるための改善策を考えるという受験者にとってはやや難しい問題となったと思われるが、求めていることは適正であり、余り複雑な展開の理解や難しい類推を求めることがなければ好ましい出題と言える。

第7問 まとまりのある文章を読み、必要な情報を整理しながら、プレゼンテーションを完成させる問題である。今年の第6問と同様の形式であった。「動物の睡眠の種類」がテーマであり、情報を効率良く的確につかむことが必要であることから、段落の概要をまとめながら読んでいくこと

が求められている。設問数は5問、配点は16点であった。

問1 プレゼンテーションのアウトラインにおいて不必要なものを取り除くことが求められている。第2段落の内容を正確に読めれば正答にたどり着くはずである。

問2 本文の内容を反映するグラフを選択する問題。設問に“the biphasic sleep”について考えることを明示してくれているので、受験者は必要な情報が何かをつかむことができ、取り組みやすかったと考えられる。このように情報を図と関連付けるような問題はとても好ましいものである。

問3～5 本文の正確な読解が求められる問題であった。選択肢も問3は5個、問4と問5は4個あり、選択肢の英文も一定の分量があり、「動物の睡眠の種類」という身近なテーマではないことから、読解にはある程度の時間を要したことが考えられる。

第8問 あるテーマに対して、複数の意見や資料について正確に把握し、エッセイを完成させる問題である。「宇宙開発」に関する5人の意見を読んで、自分のエッセイを完成させる形式である。本問は、試作問題の問題Aで示された3段階のステップを踏みながらエッセイを完成させる形式であった。本文の長さも800語を超えており、5人の異なる立場を正確に把握しながら、求められている条件で設問に対応していくことは、受験者にとっても最終問としては時間との戦いがあったように思われる。

問1～2 5人の異なる意見を正確に把握することを求められている。誰の意見を把握するかは設問で明確にされているので、得るべき情報は見付けやすく、取り組みやすい問題であったと思われる。ただし、本文の量が多いため一定の時間を要する問題ではあるだろう。

問3 5人の中から与えられた自分の立場に賛同する人を2人選び、さらにその内容を問う問題である。5人の意見と要点をまとめながら効率良く情報をまとめていく必要があり、共通テストらしい作問となっている。

問4 アウトラインを作成することに加え、さらに2つの資料からエッセイを完成させる形式となっている。資料の1つにはグラフも含まれており、自らの意見を理由付けするための情報を読み取ることが求められている。情報の整理には時間を要したと思われるが、選択肢の紛らわしさはなく、受験者の力を測る良問であったと言える。

3 総評・まとめ

本稿では2025年度（令和7年度）共通テスト「英語（リーディング）」（本試験）について検討してきた。大学入試センター発表の問題作成方針にも示されているように、「深い理解を伴った知識の質を問う問題や、知識・技能を活用し思考力、判断力、表現力等を発揮して解くことが求められる問題を重視する」という方針での問題作成には、大変なご苦労と創意工夫が必要とされると拝察する。様々な資料や図表を通して英文を読み、知識・技能や思考力・判断力・表現力等を問う内容となっており、また、外国語に関する様々な知識を実際のコミュニケーションにおいて、目的や場面、状況などに応じて適切に活用できる技能を身に付ける、という学習指導要領における目標を反映した出題となっている。受験者が身に付けた力を十分に発揮できる良問も多い。さらに、今年度は新しい学習指導要領のねらいを反映した問題形式が出題されるなど、改善への高い意識を感じさせるものであった。しかし一方で、技能統合的な理解を求める問題や、発信技能をより育成するための問題においては、その試みが十分に目的を達せられたかには、まだ議論の余地がある。また、設問数が減少し、平均点も上昇したことから受験者にとっては取り組みやすいものとなったが、大問数は8個に増え、求められる力の幅が広がり時間内に解答することに苦労した受験者も少なくなかったと思われる。今年は選択肢の紛らわしさや、単に作業量が増えることによって生じる負荷は少な

かったが、今後も受験者がその力を最大限に発揮できるような作問をお願いしたい。扱われる英文については、その題材や形式については幅広いものとなるように今後も検討をお願いしたい。そうしたことによって、教員の実際の指導や生徒の学びもより豊かなものになっていくと考えられる。

4 今後の共通テストへの要望

新課程入試に伴い、今年は試作問題を反映した新しい形式の問題が加わったが、その試みの結果についての検証が今後必要であると思われる。本稿でもいくつか言及したが、改訂の目的が十分に達せられたかについて議論の余地がある問題もあった。2022年に大学入試センターより公表された「令和7年度大学入学共通テスト出題の方向性及び試作問題の公表に関する説明資料」には、『5領域の力を総合的に育成する「英語コミュニケーションⅠ」「Ⅱ」と、発信力の強化をねらいとした「論理・表現Ⅰ」の内容に対応』とある。後者の「論理・表現Ⅰ」は『「話すこと [やり取り]」、 「話すこと [発表]」及び「書くこと」の主に3領域を中心とした発信技能の強化』をそのねらいとしているが、今回の問題形式がそれを十分に反映したものであったかについては改めて議論をお願いしたいところである。

問題作成方針において、『「高等学校において、英語を「聞くこと」・「読むこと」・「話すこと [やり取り]」、 「発表」・「書くこと」を統合した言語活動の充実が図られることを踏まえ、情報や自分の考えを適切に表現したり伝え合ったりするために、理解した情報や考えを整理したり、何をどのように取り上げるかなどを判断したりする力を重視する』とあり、5領域を統合した指導によって育成される力を問うものとしている。目標としては大変崇高なものであり、教育現場としても技能統合的な活動や発信技能の強化に向けて更なる授業改善を図ろうとする動機付けにもなっている。だからこそ、そういった指導によって受験者が共通テストで十分に力を発揮する問題作成となっているかについて更なる検証をお願いしたいところである。

これまでも大胆な提案として、将来は英語リーディング試験をリーディングとライティングの2つの技能を測定する試験に、英語リスニング試験をリスニングとスピーキングを測定する試験に変更していくことを検討していただくことをお願いしてきた。後者のスピーキングテストについては、多くの学校現場でタブレットを利用した試験が毎年実施されており、AI技術を利用すれば短期間で採点することも可能であろう。AIを活用した音声採点システムの開発は進んでおり、複数のシステムを組み合わせることで偏りを排した採点が可能となるのではないだろうか。他の3つの領域の測定については、従来の方法に従い問題の構成を変えるだけで可能になる。外部試験の利用は評価基準が複数になり、異なる試験を同一の入学試験に利用することは公平性を担保する上で大きな問題となるが、共通テストで評価を一本化すれば全ての問題が解決されることは間違いないと判断する。

また、共通テストの得点については、少なくとも国公立大学への出願開始前に受験者に開示していただくことを強く要望したい。受験者は試験中に自らの解答を問題冊子に記録し、試験後は自己採点を行い、そのデータを基に出願の作業に取りかかる。中には解答を転記し損ね、答案を再現する学生もいる。試験時間が足りない上に自分の解答を転記して、決して完全とは言えない自己採点を基に次の個別試験に向けて出願をすることは非常に負担が大きく酷なことだと思われる。得点を開示するまでにとてつもない時間を要することは想像できるが、あらゆることを合理化して何とか実現していただきたい。